

アブストラクト・テーブル (抄録一覧表)

[Meta-analysis, systematic review]

抄録 番号	著者 年(新しい順)	Patient	Exposure/Intervention	Outcome

[DB-RCT, RCT, CCT]

抄録 番号	著者 年(新しい順)	Patient	Exposure/Intervention	Outcome

[cohort study, case control study, case series, case report]

抄録 番号	著者 年(新しい順)	Patient	Parameter	Result
3-1-1	Cavalcanti MG , Ruprecht A , Vannier MW 2002	5 つの乾燥頭 蓋骨、15 名の 患者	オトガイ孔と歯槽頂 間の距離を 3D-CT 上 で計測し、測定者間、 測定者内での変動を 評価し、実測長との差 を検討する。	乾燥頭蓋骨での観察者内、観察 者間での相違は、0.10mm であ り、おのおの有意差は無かった ( $P > 0.05$ )。また実測値と比較 しても有意差は無かった。In vivo の実験では、観察者間での 相違が、0.35mm, 観察者内での 相違が、0.21mm であった。
3-1-2	Cavalcanti MG , Yang J , Ruprecht A , Vannier MW	8 つの乾燥頭 蓋骨	CT の MPR 画像での 計測値を実測値と比 較する。	CT の MPR 画像と実測値では有 意差は無かった。( $P > 0.05$ )
3-1-3	Cavalcanti MG , Yang J , Ruprecht A , Vannier MW	8 つの乾燥頭 蓋骨	CT の MPR 画像での 計測値を実測値と比 較する。	CT の MPR 画像と実測値では有 意差は無かった。( $P = 0.9$ , $P$ $= 0.7$ )
3-1-4	Naitoh M , Katsumata A , Kubota Y , Arijii E	3 つの無歯顎 乾燥下顎骨 (片側)	断層、CBCT, MDCT の data を元にした 3 D 画像の解剖学的 5 部位の 5 点法による 視覚評価	MDCT の画像が最も良好で、次 に CBCT, 断層の順であった。5 部位の平均でみると、MDCTvs 断層、MDCTvsCBCT, CBCTvs 断層で有意差を認めた。
3-1-5	Naitoh M , Katsumata A , Nohara E , Ohsaki C , Arijii E	3 つの無歯顎 乾燥下顎骨 (片側)、診断 用プレート付 き	MDCT から作成した 再構成画像 (double oblique) と micro-CT 画像にて距離比較	0.5mm thick, table pitch 1.5, tilt 0° の時の誤差が最も小さかつ た。この値は、conventional scan, tilt 5°-20°と有意差を認 めた。2 つの hilical scan の条 件では、測定値に有意差は認 めなかった。
3-1-6	NaitohMunetaka , FurutaTakashi , OkumuraShinji , ArijiiEiichiro	15 名のインプ ラント術前患 者	直線断層の二値化画 像での骨梁とされた セグメントの割合と CT の reformatted image における CT 値 の相関	直線断層で描出できる骨梁の 割合と CT の再構成画像での CT 値の、相関はたかく、相関 係数は、歯槽部で、0.76、下顎 体部で、0.85 であった。

3-1-7	Preda L , Di Maggio EM , Dore R , La Fianza A , Solcia M , Schifino MR , Campani R , Preda EG	10名の患者	CTのMPR画像のqualityを比較する。 1. conventional scan (スライス厚 1mm, テーブルフィード 1mm), 2. helical scan (スライス厚、1mm, テーブルスピード 1mm/s), 3. helica scan (スライス厚、1mm, テーブルスピード 2mm/s),	Helical scan においては、どちらの条件でも有意差は認められなかった。Conventional scan と Helical scan とでは、評価に有意差がなかった。
3-1-8	川原英明 , 下田信治 , 小林馨 , 川崎堅三	未固定男性献体3体	CTのVR-3D像における測定距離を実測長と比較する。 (下顎骨二点間距離)	計測誤差の平均は、 $0.394\pm 0.29\text{mm}$ で、誤差率は、 $0.56\pm 0.47\text{mm}$ であった。スパイラルCTにおけるVR-3D画像での測定距離は、信頼のできる値と考えられた。
3-1-9	澤田久仁彦 , 松本邦史 , 加島正浩 , 里見智恵子 , 萩原芳幸 , 新井嘉則	乾燥下顎骨	歯科用CTおよびMDCTのdataより作成した再構成画像での測定値と実測値の比較検討。	MDCTでは実測長と有意差があったが、歯科用CTでは有意差がなかった。
3-1-10	田中力延 , 細川洋一郎 , 大西隆 , 佐野友昭 , 金子昌幸	微小球体 0.3mm	微小球体 0.3mm を helical CT で撮影し、半値幅、およびZ-MTFを求める	1. 設定スライス厚を1mm以下にしても、実効スライス厚は、期待されるほど小さくならない。 2. ヘリカルピッチは、小さいほど設定スライス厚および実効スライス厚の誤差は低くなる。 3. 設定スライスおよびピッチが小さいほど、空間分解能は良好である
3-1-11	内藤宗孝 , 勝又明敏 , 野原栄二 , 泉雅浩 , 大崎千秋 , 有地榮一郎	インプラント予定患者22名	多断面再構成画像とダブルオブリーク断面再構成画像での歯槽頂〜下顎管上壁間距離の差を比較。	ステントの近遠心的な傾斜角が大きくなると多断面再構成画像とダブルオブリーク断面再構成画像の差が大きくなった
3-1-12	槇原政博 , 西川慶一 , 黒柳錦也	無歯顎の乾燥上下顎	リニア断層、一般断層、CTのMPR像における構造物の明瞭度および距離の計測精度	リニア断層の明瞭度は、舌側皮質骨をのぞけば、一般断層と同等であり、MPRよりすぐれていた。距離精度の関しても、一般断層と同程度であり、

				MPR より優れていた。
3-1-13	森田康彦，菅田栄一，犬童寛子，加藤二久，原田康雄，河野一典，佐藤強志，馬嶋秀行，和泉雄一，佐々木武仁，野井倉武憲	半解剖学的下顎骨ファントム	アントにおいて、模擬下顎管とスキャン平面との角度が、平行、30°、垂直で行い、矢状断、冠状断の再構成画像を作成した。	大きな水槽に（直径 20 c m）の水槽に下顎骨ファントムをいれて撮影すると、ノイズの影響が強く出た。 下顎管とスキャン平面が、平行になると描出が悪くなった。 （半解剖学的下顎骨ファントム）